

所属学部/研究科・学年(留学時): 法学部 3 年

留学先大学・参加コース: UC Berkeley・Summer Peace Institute

コース期間: 2012 年 6 月 4 日 ~ 2012 年 7 月 13 日

卒業・修了後の就職希望先: 1. 研究職 2. 専門職(医師・法曹・会計士等) 3. 公務員 4. 非営利団体 5. 民間企業
6. 起業 7. その他()

1. 留学先大学の概要

本プログラムは University of California, Berkeley(UCB) 主催であるが、実際にはコスタリカにある University for Peace(UPEACE) で UCB サマープログラムの参加学生、UPEACE の大学院生とともに勉強する。UPEACE は 1980 年に国連総会決議により設立された大学院大学・研究機関で、国際的な平和構築や地域紛争の防止解決を行う専門的な人材養成を目的とする。キャンパスはコスタリカ首都サンホセの西 20km の Ciudad Colon にある。

2. 留学の動機

東大にいただけでは得ることの困難な、多様なバックグラウンドを持つ学生との少人数での集中した学びに期待した。また、ずっと関心を持ちながらまとめて学ぶ機会がなかった、平和構築と人間の安全保障の分野に関して視野を広げたいと思った。教室内での講義や討論にとどまらず、地元コスタリカでの取り組みをボランティアとして体験するフィールドワークが課されることも魅力の一つで、座学で学んだことを実感と結びつけながら深く考える機会になると考えた。

プログラムそのものだけでなく、世界 10 大学から集まってくる学生との 6 週間という長期に及ぶ共同生活にも期待した。日々の徹底的な議論やコミュニケーションを通して、単なる英語力と言うだけにとどまらず、批判的思考力や分析能力を鍛えたいと考えた。特に平和構築と人間の安全保障という分野は、それぞれの価値観の違いを反映する議論になりやすく、全くバックグラウンドを共有しない人との意思疎通を試行錯誤するいい機会になると思った。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

Global Summer Program(GSP)の申請・審査中に今秋9月からの別の留学プログラムにも決まっていたため、2つのプログラムの手続きを同時進行せざるをえず、GSP 参加期間中にもう一つのプログラムの手続きに支障を来さないかなど、不安要素が多かった。GSP の選考通過通知後 confirmation 自体をためらったが、バークレイ担当者含め各方面に質問・配慮をお願いして何とかあった。困ったときはとにかく何でも相談してみると善処していただけることが多く、非常に助かった。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

コスタリカは滞在 90 日以内ならばビザは不要。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

バークレイ校指定の保険(保険料は参加費に含まれている)

救援者費用重視で民間の海外旅行保険にネット加入(50 日間で 1 万円強)

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

法学部に簡単な留学許可申請書提出(入学許可書、留学の目的、シラバスなど)

GSP で獲得した単位の認定申請はできる。ただし法学部の場合授業形態が大きく異なることなどから認定許可されるかは不確実であることにくわえ、長期欠席により夏学期の東大法学部の単位が認定されなくなる可能性がある。私の場合はもともと上記の留学プログラムのためこの夏学期の単位を取れないので、これから申請する予定。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

明らかに英語レベルは不足していた。出発前は英語で行われていて GSP のテーマにも関係する授業(法学部特別講義の Human Security、国際紛争研究、文学部 People Crossing Borders など)を意識的に履修し、アカデミックな英語に慣れる努力をしたが、行ってみると実際には全然足りなかった。英語力が高ければ高いほどプログラムから得られるものは多いと思う。留学生の友人とのカジュアルな会話にも慣れておいた方がよい。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

コスタリカでは英語も話されているがスペイン語が第一言語なので、スペイン語の素養がないと一般のコスタリカ人との交流が難しい。そしてこの地元の人との交流こそがホームステイ長期滞在するこのプログラムの醍醐味でもある。特に後半のフィールドワークではスペイン語ができないと参加可能なプロジェクトの選択肢が大幅に狭まる。

4. 留學生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

前半:ホームステイだが独立した一軒家に学生 6 人で住んだ。3 週間以上の共同生活なのでハウスメイト同士、ホストファミリーとの交流はかなり濃くなる。ただしステイ先によって条件は大きく異なる。ステイ先やハウスメイトとのマッチングは University for Peace 側が行うが、決まったのは出国直前だった。

後半:私は熱帯雨林でボランティアをしたので、ロッジの一部屋で 3 人相部屋だった。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

常“初夏”の国、コスタリカで 6 週間過ごす。雨期だったが日本のように蒸し暑くなく、朝晩は涼しくなるので快適。大学(UPEACE)までは通学バスで 30 分ほど。朝晩はホストファミリーが食事を作ってくれて、昼は大学のカフェテリア。家にキッチンがあったので自分で弁当を作っていくこともできる。米ドルを使える場所も多いが地元ではあまり喜ばれないのでクレジットカードで現地通貨 Colon をキャッシングして使っていた。公共バス・タクシーはとても安い。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

特定の危険な場所以外は治安はよい。特に多くの期間過ごす Ciudad Colon はのんびりした小さな町。

とにかく蚊と紫外線がすごいので虫除けと日焼け止めは必須。現地で強めのものを買い足した。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空費往復約¥200000、授業料・家賃・食費など\$4645、その他食費・宿泊費・小旅行費など約\$900

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

Friends of Todai \$3000

JASSO ショートステイ¥160000

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

前半 3 週間:放課後 1 回 2 時間ずつスペイン語の授業(計 8 回で\$40)に参加可能。

毎週末:参加者同士でコスタリカ国内の小旅行を企画。Lonely Planet が非常に役立った。

後半 2 週間: Peacebuilding Practice としてコスタリカ国内の NPO/NGO でのボランティアインターン。いくつかの候補の中から選べる(以下に詳述)。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

●Problems Without Passports: Human Security in the 21st Century

●Peacebuilding Practice(いずれも申請手続き中)

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

【前半】

午前中 2 時間 40 人弱のクラスで講義、午後 2 時間 12 人ほどのクラスに分かれてセミナー。セミナーは毎日違う

スタイルで進み、4 人の小グループで簡単なケースの分析とプレゼンをしたり全体でディスカッションしたりする。厚さ 3cm ほどの冊子を初日に渡され、その中から毎日 30 ページほどの Reading Assignments が出される。余力があれば Additional recommended もオンラインで公開されているが Required reading だけでも大変。成績評価対象になるのは group research paper と presentation で、poverty, food/water/environmental security, disarmament, immigration, human trafficking, drug trafficking などの Human security issues から一つを選んで分析し、現状の対応策 (Liberal Peacebuilding) を批判的に考察、さらに Glocal Peacebuilding と呼ばれる新たな対応策のケーススタディをする。これを 6~7 人のグループで 2 週間で仕上げる。

【後半】

3-8 人ずつ異なる NGO/NPO でボランティアインターン。熱帯雨林でのリサーチアシスタントや貧困地域での英語教育プログラム、リサイクル事業、女性の自立支援事業などで、仕事内容は各プロジェクトによって全く異なるが、1 日 4 時間週 5 日労働を 2 週間。最終的にその NGO/NPO の活動がどのような Human Security Issues にコミットしていてどのような成果をあげているか、自分たちはボランティアとしてどんな貢献をしたかをグループでプレゼンし、報告書を書く。期間中毎日 personal reflections が課されるが時間的な余裕はかなりある。予習などは特になし。

③学習・研究面でのアドバイス

このテーマ (Human Security/ Peacebuilding) や国際情勢に関する前提知識がない状態ではついていくのが大変だと思う。UCB の Peace & Conflicts を専攻する学生が多く参加していたが、その知識量と情報収集能力に驚かされた。世界の難民・移民・紛争・貧困などの現状にできるだけキャッチアップしていくべき。

また、このプログラムを主催大学の UCB キャンパスではなくコスタリカで行う意味をよく考える必要がある。軍隊を持たない・エコツーリズム・教育福祉などで特色あるコスタリカという国についてもっと事前知識を入れていくべきだった。コース中の勉強面で役立つだけでなく、地元の人々との交流が深まる。

Reading は全てを完璧に読みこなせばいいわけではなく、それをふまえて自分が何を考えたかが問われる。午後のセミナーでは Reading や講義をふまえた新しい情報をもとにディスカッションやグループワークをするので、テーマ全般について自分なりの問題意識を醸成しておくことも必要。

④語学面での苦労・アドバイス等

Reading と Lecture は行ってからでも努力次第で何とかなるが、Discussion は何ともならない。私はディスカッションで言いたいことを事前に簡単にメモしていたが、それでもどんどん話が発展していく中で、流れに合った意味ある発言をするのは難しかった。分からないときには早めに分からないと言い、率直に TA や友達に相談したら力になろうとしてくれる (最終的には自分で何とかするしかないのだが)。

個人的には授業中のフォーマルな英語とは別に日常生活での英語に苦労した。ちょっとした冗談や口語表現でのやりとりが理解できないのは精神的につらい。長期の共同生活で密な関わりが可能なだけに、圧倒的に語学力が足りない中でどうやって会話に入り人間関係を築くか、各自の努力と工夫がより問われるプログラムだと思う。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制 (語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

サポート体制は特にないが、個人的に配慮してくれる人は多かった。教授やコーディネーターの方々はフランクで話しやすい。ちなみに IARU で来ているアジア系の学生は東大の 3 人だけだった。

②大学の設備 (図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

コスタリカは公衆無線 LAN が発達していて、どこに旅行してもインターネット環境の心配はなかった。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

これまでこのような資料がなかったので準備段階の細かいことは昨年の方と個人的に連絡をとってアドバイスいただいた。参加の Confirm 後プログラム参加者の Facebook group に入れるのでそこで相談することもできる。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

本来 IARU は私のように英語力が中途半端な状態で参加するようなプログラムではない。もっと英語ができればもっと得るものがあっただろうし、プログラム自体に貢献できたと思う。しかし語学力がないからといってためらう必要もない。行ってみればなんとかなるし、同じ期間を日本で過すよりはるかに多くの刺激や発見にあふれている。

語学に自信がないならなおさら、十分な事前準備をしてできるかぎりチャンスを活かす努力が必要だったと思う。私は事務的な手続きは何とか無事終えたものの、コースの中身に関する見識やコストリカに関する情報収集まで手が回らず、英語力のなさをカバーできなかったのが悔やまれる。

コース期間は 6 週間だが、6 週間ではない。私にとって、まだ未消化な部分を今後いかに自分の血肉にしていくなか、今回の経験を今後はどうつなげていくかがこれからの課題である。留学を決めるときは留学期間だけを考えて計画を立ててしまいがちだが、コース事前準備から事後処理まで含めて、その留学プログラムに多大な時間とエネルギーを費やす見通しと覚悟が必要だと思う。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。





2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

When I found the “Summer Peace Institute” course on the list of Global Summer Program, I decided to apply for it without much thought. To be honest, all I wanted to do was to take part in any one of GSP courses, and it didn’t matter for me which one I would take. With the third year in the University of Tokyo just around the corner, I was afraid of my lacking of something to be learned in these two years, such as analytical skills and critical thinking. One-way lectures in a large class of my major, law and politics, seemed not effective to improve such skills, and it seemed studying abroad would change the situation and my attitude to learn.

Summer Peace Institute, described as a course to “deepen your understanding of the changing landscape of contemporary international relations and sharpen your critical thinking and communication skills,” seemed to be a good match with my purpose of studying abroad. In addition, its focus on peacebuilding and human security attracted me as I have been interested in current issues in Japan related to human rights. That was almost everything in my mind when I decided to take it, and I had no idea how it works for me at that point. Now, with my certificate of completion, I can tell a few more about in what particular points this program could be special for me.

Anyone who looks through the course website can expect “a diverse international group of students” will make classroom discussion stimulating, which caught my eyes too in the first place. The reality was more than that. Putting myself in the seminar room, I found myself surrounded by great diversity, with not limited to GSP students, but with spirited students from UC Berkeley who mostly major in Peace and Conflicts, and graduates of University for Peace (UPEACE). Each student from USA had different background from all over the world, and most UPEACE graduates were from Africa and South America with good reason to engage in their field. It was not simply about diversity. Every student contributed to lively discussion and research in some ways reflected their personal experience and stories. Some had unique viewpoints and knowledge on human security issues, sometimes even taking an action by themselves.

Though not so strongly marked in the course description, the fact that the course offered homestays with local families made a difference. I enjoyed daily exchanges of ideas with host family and housemates, as well as academic discussion in class. We spent a weekend together with host family on their traditional farm in countryside, asking their way of life and learning their view on marriage, family and so on. Living together is not only about pleasant things. Sometimes petty troubles and quarrels did happen. Seeing how people with different nationality dealt with them, and of course trying to “make peace” by myself, I realized interesting differences in perception and coping strategy among us, and went through difficulty of peacebuilding in daily life. Regrettably I had not done much research on Costa Rican society and culture in advance, but that’s how I learned it in practice.

The most interesting experience I had never imagined beforehand was working together on group projects. Six weeks of the course were divided into two sections, first three weeks for lectures/seminars on “Human Security in the 21st Century” and the latter half for field study on “Peacebuilding Practice.” At the end of both sections we undertook research assignments and in-class presentations in a group of 3-8 people.

As for the first half, I was surprised to know how differently group work was organized from what I had been familiar with in Japan. In my group, we first briefly draw the rough sketch of presentation together and divide it into parts of each member, then start working individually. Though you would ask someone to make sure you’re going on right way, it is not until the last moment before in-class presentation that you get the whole completed picture. Having not done one’s part should be seen as irresponsible, but uncalled interference in other part would be annoying as well. First I felt confused to find myself only one who concerned about consistency and harmony as a group, but got impressed to see our presentation perfectly worked out in the end. It seemed each one knew well where to find useful information and what points to show in which context. In some other groups such a way of working did cause problems, but grew everyone mentally up to some degrees. I would not say that is the best and only way of working as a group, but it did made me do away with my fixed idea and reflect my role in a group.

The second half has a different story. I worked in the rainforest as a volunteer in such a small group of three that I had an opportunity to observe how other students actually work on their parts. This time, we were supposed to complete a report paper along with volunteer work, but until the last moment all of us were obsessed by life in the rainforest and behind of our own project. I did worried about not having enough time and sources, but once we started, I found others had collected useful facts through daily observation and dialogue with people, not only through the internet and official pamphlets. They seemed to simply enjoy chatting and working in the rainforest, but at the same time they had interpreted and analyzed critically what we saw and heard. I doubt I could achieve the same even in Japanese if I were working by myself.

In some sense, I had a hard time falling behind of others in these 6 weeks. It is

partly because of my language problem and partly because of shortage of academic skills. And yet I believe such a pain carved insightful experience to lift my spirits. Six weeks is not enough to improve radically my English and way of studying, but does serve well to urge me to confront the reality and make serious efforts to catch up with others.

Now back in Japan, I am waiting for the coming studying abroad program, for one academic year in USA from this September. Its application period was the same with IARU, and so was the reason and motive of my application. After these 6 weeks they still remain unchanged radically, but when I simply say the necessity of “critical thinking and analytical skills,” it is not merely something sounds nice, but something to bring ideas into my heads about what I’m missing and what I need to make difference, with details and actual feelings. Now I am ready to jump into different climate of learning in USA, and take every single step to change the situation of mine by myself.

所属学部/研究科・学年(留学時):工学系研究科

留学先大学・参加コース:University California Berkeley

コース期間:2012年6月4日～2012年7月13日

卒業・修了後の就職希望先:1.研究職

1. 留学先大学の概要

留学先大学は IARU GSP のコース上は、University California Berkeley となっていますが、実質的には University for Peace です。内容は人間の安全保障や平和構築です。コース参加者のほとんどが University Berkeley の生徒です。他の GSP の生徒はオーストラリア国立大学、コペンハーゲン大学、ETH の生徒がいました。（全てゲルマン語圏の人なので、日本人が英語に関して一番苦勞すると思います。）コースの前半では、人間の安全保障や平和構築についての授業とそれに平行して研究発表を行います。授業は、1 週目は人間の安全保障と平和構築の概念を学び、2 週目は国際法と経済政策について学びます。3 週目はアラブの春についての授業でした。研究発表は人間の安全保障に関連する分野として、軍縮、貧困経済、human trafficking, drag trafficking, immigration, があり、その中の一つを選び、特定の組織や集団に注目して行います。プログラムの後半では、インターンシップを行い、人間の安全保障や平和構築の観点から分析を行い発表とレポート提出をします。自分は熱帯雨林で ecotourism を行っている会社でボランティアを行い、発表を行いました。研究発表、インターンシップ成果報告ともに、1000word 程度の分量で、グループで行います。

2. 留学の動機

留学の動機は、英語力の向上、学習内容が挙げられます。留学前の英語力は TOEFL-ibt82 点程度だったのですが、英語が苦手な自分は自力ではこれ以上上げることが困難のように感じられました。これ以上英語力を上げるためには、感覚的な問題ですが、1 か月以上の留学が最も有効な手段のように思われました。参加したコースは一カ月半でしたので、ちょうど良い期間だと思い参加しました。学習内容は、人間の安全保障と平和構築でした。宇宙開発を進めていくことを目標に今まで学業に励んでいた自分でしたが、4 年生時の研究で JAXA(宇宙航空研究開発機構)の次世代エンジンの研究に関わり、航空宇宙分野での次の科学技術の実現は政治やビジネスの問題だと思いました。そこから、政治やビジネスのことを考えるに従って、宇宙開発より人間の幸福の方が大事なのではないかと思うようになりました。そして社会科学が進歩したならば、自己実現によって人が動機づけられる社会設計というものがあるのではないかと考えるようになりました。自己実現は個人によって異なるため、最終的には競合することがあまりないのではないかと考えたからです。そこで、その根本と最終状態であるであろう貧困と平和について学んでみたいとおもい、このプログラムに応募しました。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

Berkeley 側からの返信が遅いため、自分の中で明確な期限を設定し、きちんと催促をすることが大切です。また、気になることは気兼ねなく聞きましょう。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

本留学プログラムはコスタリカに滞在のためビザは必要ありません。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

University California Berkeley の用意してくれた保険に加入しました。このほかに、上記に書きましたように、プログラム開始直前に留学が決まったため、入り易さの観点から民間の海外旅行保険に入りました。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

研究科では、取り立てて手続きを行いませんでした。工学系研究科では、専攻ごとに事務局があり、そこを通すのが通例となっています。そこで、自分の専攻である航空宇宙工学専攻の事務局に問い合わせたところ、単位等については、教授会で決定することになっているが、先生方からの回答がないため、今のところ未定と言われたからです。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

出発前の英語レベルは TOEFL-ibt 82 点でした。コース開始直前で留学が決まったため、準備は行えませんでした。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

スペイン語の辞書と会話帳を持参するとよいです。また、日本語で良いので、人間の安全保障に関する本を読むと湯よいと思います。俗語は知っているとより留学が楽しくなると思いますが、優先度は低いです。そこまで準備したいという方は、小説等を読んでおくとうよいと思います。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舍の様子、見つけた方法など)

住居は、University for Peace から指定された、ホームステイ先でした。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

気候: ほぼ毎日雨が降ります。気温は、半そで半ズボンの場合、雨の日は少し朝少し寒いですが、それ以外は半そで半ズボンで心地よく過ごせます。交通機関はバスかタクシーです。バスはかなり安いです。大学周辺は大学以外に民家が多少ある程度です。お金は、ATM があるので、それを利用しました。銀行に申し出をしなかったのも、口座からの引き出しはできませんでしたが、送金やクレジットカードのキャッシュサービスを利用しました。事前に銀行に申し出をし、口座からの引き出しを可能にすることをお勧めします。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安は良いとは言えません。大学側から、夜は 9 時以降一人で出歩かない方がよいと注意されました。また、当然ですが常備薬を持っていくことが肝心です。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

まず、航空券代の 22 万円とコース参加用の 5000 ドルです。その他で、食費・交通費・娯楽費が 68000 円です。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

JASSO から 16 万円と Santander Global Summer Program Scholarships から \$2000 です。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

参加したプログラムは、前半部と後半部がありました。前半は大学が用意して下さった、ポアズ火山観光やウォーターラフティング等のアクティビティーに参加しました。プログラムの後半部ではインターンを行いました。また、後半部の休日は他のインターン参加者とビーチへ行きました。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

4単位の授業と3単位の授業です。このコース自体が先の二つの授業に相当します。単位認定は前述のとおりです。

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

予習課題として指定された論文や記事(配布される)を読むことが課されます。そして、その内容に即したまたは関連した授業が行われます。内容は多岐にわたり、分野的には国際政治、国際法、経済政策、イスラムの歴史等です。これらは、全て人間の安全保障や平和構築に関わる分野です。印象に残っている授業は、Prof. Victoria のグローバルなアプローチのモデルの授業です。

③学習・研究面でのアドバイス

日本語でも理解が難しいことを英語でやるので、曖昧にしか分かりません。また、リーディング課題の量がとても多いので、全部読むのは難しいです。理解するよりも、授業で「リーディングでそんなような感じのことかいてあったな～」と思える程度に目を通すのが良いと思います。

④語学面での苦勞・アドバイス等

周りがネイティブなので、俗語が飛び交います。故に、殆ど分かりません。しかし、参加の意志を示し、くじけないで聞き続けていれば何となくわかってきます。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

スタッフや他の生徒が、気にかけてくれるので、相談したいことがあるなら、気軽に相談できます。生活面(食事、洗濯等)はホストファミリーが面倒を見てくれるため、心配はありません。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

図書館、食堂、サッカー場があります。食堂ではランチが\$5 で食べられます。wifi が利用可能です。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

ALC の英辞郎 web 版。地球の歩き方

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

留学を考えているならば、留学すべきです。考えに浮かんでいる時点で、やってみたいという欲求があるからです。それを消化すれば、きっと次の展望が見えてくると思います。特に、大学生の方はすべきだと思います。日本では、リスクを取ることを許されるのは学生の時だけです。日本でのキャリアでは少々廻り道になるかもしれませんが、自分の枠を広げるという意味で、少し先の将来では、精神的な意味で必ず役立つと思います。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

本留学は自分にとって大変有意義なものでした。自分は、University California Berkeley が主催する、Summer Peace Institute のコースに参加しました。参加の目的は主に英語力の向上と学習内容といった点にありました。

まず、英語力の向上です。一定の英語力はあったのですが、もう少し英語力を向上させる必要性を感じていました。しかし、もともと英語が苦手な自分としては、英語がどうしても必要な環境に身を置かなければ、これ以上英語を向上させることが出来ないのではないかと感じていました。なぜなら、英語以外に他にもやるべきことが多々あり、そちらの方が有意義に思えたからです。また、感覚的な問題ですが、その期間は一月以上必要だろうと思いました。参加したコースは一月半月半の物だったので、自分の英語力向上の目的によく合っていました。

学習内容は、人間の安全保障と平和構築でした。宇宙開発を進めていくことを目標に今日まで学業に励んでいた自分でしたが、4年生時の研究で JAXA (宇宙航空研究開発機構) の次世代エンジンの研究に関わり、航空宇宙分野での次の科学技術の実現は政治やビジネスの問題だと思いました。そこから、政治やビジネスのことを考えるに従って、宇宙開発より人間の幸福の方が大事なのではないかと思うようになりました。そして社会科学が進歩したならば、自己実現によって人が動機づけられる社会設計というものが可能なのではないかと考えるようになりました。自己実現は個人によって異なるため、最終的には競合することがあまりないのではないかと考えたからです。また、自己実現社会によって、生まれる余剰増えれば、宇宙開発が促進されると思えたからです。そこで、その根本と最終状態と思われる、貧困と平和について学んでみたいとおもい、このプログラムに応募しました。

これらのことに対して、留学を終了した今の時点から見ると、英語に関しては概ね達成できたのではないかと考えています。特に聞き取り能力が向上したように思えます。

また、学習内容に関してですが、授業は、1週目は人間の安全保障と平和構築の概念を学び、2週目は国際法と経済政策について学びました。3週目はアラブの春についての授業でした。研究発表は人間の安全保障に関連する分野として、軍縮、貧困経済、human trafficking, drag trafficking, immigration, があり、その中の一つを選び、特定の組織や集団に注目して行います。自分は貧困経済のテーマを選びました。授業内容に関しては、その基礎すら知らない国際法の内容を除き、自分が考えていたことと殆ど一致していました。その簡潔な表現を自分は与えることが出来ていませんでしたが、授業での内容は、自分とは異なった表現や自分のアイディアに具体例を与えてくれました。実際は、分かるところしか分からなかったのも、このように思ったのかもしれませんが、細かい点を議論せず、ベースとなるアイディアに関して言えば、おそらく自分の考えとかなり一致している部分が多かったと思います。研究では、コスタリカの首都、サンホセ内の貧困地帯である La Carpio という地域に注目して研究を行いました。これらを通じて得られたことは、このような問題は、根本的には社会合意のあり方により生まれると思うようになりました。集団内の問題で見れば、どこまでを同一集団として見なすか、どこまでをその集団の余剰分配の中に入れるか、どこまでの余剰分配を許容するかといったことが主にあり、集団間の問題で見れば、どこまで他集団と接続するかということになるからです。これらの合意には、法や政治による言明かされた社会合意のみならず、文化のような暗示的な合意も含まれます。また、パワーにより強制的な合意をさせられる場合もあると思います。また、明示的な合意やパワーによる合意はコントロール可能であるが、暗示的な合意はマスメディアを通じた発信でのみコントロールすることが出来ると考えています。一方で、経済やビジネスのような直接に利益的な要素がこれらの合意に対して、常に影

響を与えると同時に合意が主に労働形態という形で、経済やビジネスに影響を与えます。また、外部集団による経済的要素以外の影響もあります。これらの合意とそれに働きかける様々な要素の多岐にわたる双方向の影響が当該の社会状態を浮かび上がらせていると自分には思えます。

このような思考を得たことによって、自己実現社会なるものも、日本のような先進国では可能かもしれませんが、それも社会合意の問題だと思うようになりました。なぜなら、それは個人の個別化に合意した上で成立するものであり、多くの人がそれを望めば可能ですが、逆にそのような自己実現社会は、個人に自己実現と社会的利益をかみ合わせるように強いるとともに、その個人がその信念をもって社会に関係していくことが重要であるという考えがベースにあるために、そのような個人として自らを構築することを是とするような合意を要するからです。さらに、自己実現社会が普遍的価値を持つと留学前は考えていたのですが、社会合意によって自己実現の形式が異なるため、自己実現社会の具体的な表れは社会合意依存であると思います。

このような考えを得たことで、この留学を通じて自分の進路を明確化出来たことは自分にとっての成果でした。この留学で得られた考えは、自分は研究をやるのが最も良い進路であり、主に科学技術の進歩を支えるような分野を研究し、科学技術の発展を促進していき、可能であれば、社会科学的応用に触れる程度で進路を定めるのがよいと思えました。自分にとっては、社会合意という物が意識できてしまって以上、何かの社会合意に同意して、それを促進させるような意図を持つことはできません。なぜなら、自分の信じている社会合意とは異なった合意を形成している集団に対する暴力のように自分には思えるからです。故に、当面は現在の研究テーマである「多目的最適設計探索」の分野に集中し、何かしらの成果を出したいです。勿論、このような考えですら、恣意的であり、科学技術の促進を是とする価値観を強く体现する社会にコミットしているとは思いますが、自分は科学技術という実の部分から何かを変えていきたいと思っています。

今後の国際理解の意欲についてですが、今後自分は国際理解を積極的に行っていくつもりはありません。なぜなら、国際理解は自分の仕事ではないと思っているからです。勿論、自分のこれからの余暇で許された時間の中で国際理解の機会に払うコストが小さいならば、そのことを嫌う理由もありますが、これ以上の国際理解は自分にとって積極的に行うようなことではないと思っています。なぜなら、自分は社会に貢献したいのではなく、人類に貢献したいと考えていると自分では思っており、そのための具体的手段は、短期的には自分にとっては、上記の研究であるからです。

国際理解というものについて少々考えてみますと、この留学を通じて、個人同士が理解し合うためには、言語の障壁と言語による発想の障壁と文化の共有度の障壁を乗り越えるために、一つ一つ相手を知っていくことが必要であって、その共有をより深く、より多く行うのが国際理解だと思いようになりました。この留学プログラムで、熱帯雨林でインターンを行ったのですが、そこで一緒にインターンをした人たちとは、かなり親密になれたと思います。これは、熱帯雨林が孤立環境であったため、体験の意識がその集団に集約され、密な共通体験を持ったことでなされたものと思っております。これが、上記の国際理解の根拠です。

そして、これを本当に行った人間にこの留学で出会うことが出来ました。平和大学で授業を行って下さった教授は、単身でイラクやソマリアに乗り込むなど文化や政治の枠にとらわれずに積極的な活動を行っていました。しかし、彼女に職を与えてくれたのは平和大学だけで、他の集団は職を与えてはくれませんでした。

このストーリーについて少々考察すると、上記のような国際理解とリーダーを育成する意味での国際理解は共有する部分の多くありますが、少々異なったものなのかもしれません。勿論、この二つの国際理

解が同一となるようなことも可能ですが、現在の国家間の動きを考えると、この二つはかみ合っていないと思います。しかしながら、逆に日本が二つの国際理解を噛み合わせた人材を輩出するとともに、許容できる社会であれば、日本のプレゼンスも高まるのかもしれない。

今の自分の思いは、研究に向かっておりますので、海外の友人を得るという意味の国際理解を嫌うつもりは全くありませんが、リーダー的地位に必要となる国際理解を深めていくつもりはあまりありません。

今後の海外留学に関してですが、現在の研究テーマよりもやりたい研究テーマが海外の大学で行われており、それが日本よりも進んでいるならば、海外留学をしたいと思います。自分の一番の研究目的は、宇宙空間を生活圏にすることであり、それには多分野にわたる科学技術の発展が必要であると考えていますので、それが出来るような分野の研究をしていきたいです。だからこそ、それが最も達成できると思える場所に行きたいです。

以上が本留学の報告です。

東京大学 留学プログラム報告書（プログラム名：2012 IARU Global Summer Program）

所属学部/研究科・学年(留学時): 法学部一類 3年

留学先大学・参加コース: UC Berkeley Summer Peace Institute

コース期間: 2012 年 6 月 3 日 ~ 2012 年 7 月 14 日

卒業・修了後の就職希望先: 2. 専門職(医師・法曹・会計士等)

1. 留学先大学の概要

UC Berkeley の Summer program に参加する形で、国連平和大学に留学した。

国連平和大学とは、国連決議に基づいて1980年に作られた研究機関で、人類全ての間に理解、寛容、平和共存の精神を広げる目的で、平和に関する教育を行い、人道支援を供与するために設立された。

2. 留学の動機

将来、海外ロースクールへの留学を考えているため、海外留学の経験を積みたかった。

英語での授業がどのようなものなのか、discussion はどのように行われるのか。海外の学生と直に交流してみたかった。

将来、平和構築部門で働いてみたいと考えていたため、国連平和大学という、平和構築に特化した大学で、レベルの高い UC Berkeley からの学生や、アフリカなど様々な国からきた人々と、それぞれ異なる価値観に基づいた議論をし、まだ年齢が浅いうちに自分の価値観を変えることが将来プラスに働くと思った。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

締め切りが試験中で、試験勉強をしながらメールのやりとりや書類の作成を行うのがとても大変だったので、早め早めに行うことが大事です。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

ビザは不要。乗り継ぎのためにアメリカで ESTA を申請したのみ。ネットで数分で完了。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

生協の海外旅行保険

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

特になし

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

TOEFL82 その後は特にしていない。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

薬。非常食(缶詰等) 虫除け。 パソコン必須。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舍の様子、見つけた方法など)

ホームステイ ダブルベッド、トイレ、シャワーのある大きな部屋を一人で使わせてもらえたが、シャワーは壊れて使えず、窓も壊れていて常に開いている状態だったため虫がたびたび入ってきた。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

気候は日本の避暑地のようなのだが、一日に何度もスコールが降る。

大学は山に囲まれ周辺には何もなく、ホームステイ先から大学まではバスで15分程度。交通機関はバス、タクシーのみ。

食事はコスタリカの家庭で食べられているようなもので簡素。(基本的に毎日ライス&ビーンズ+肉 or 魚など+サラダ)

お金に関してはクレジットカードと現金。毎日の昼食代と観光費用くらいで、あまり金を使う事はなかった。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安はよい。ただ、休日に行ったカリブ海のリゾート地では薬物が蔓延しており、同じプログラムに参加する他大学の学生から誘われたりすることもあるので注意が必要。

医療機関に関しては不明。

健康管理については、とにかく睡眠をたくさんとること、生魚は控えること、一人の時間を作る事などを意識した。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃 20万

授業料 4900ドル

教科書代

家賃

食費 500円×15日

交通費 空港～学校までのタクシー代 バス運賃 1万

娯楽費 5万

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

JASSO

民間企業 2000ドル

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

プログラム後半の3週間は熱帯雨林でのインターン。

週末はアクティビティも豊富

- ・ 川下り
- ・ 火山、国立公園巡り
- ・ コーヒーツアー
- ・ カリブ海のビーチで過ごす
- ・ サンホセ観光 など

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

Problem without passport ●

Peace building practice ●

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

前半は、毎日 reading material を予習、lecture, 双方に基づいた discussion が行われ、予習は必須であった。

予習に追われ復習の時間はなかった。

印象に残ったのは、アラブの春に関する授業の最終日、初日からデモに参加したエジプトの学生と skype をつないで議論したこと。

③学習・研究面でのアドバイス

出発前に留学先での学習テーマに関連する文献をできるだけ読む事。プログラム内では他のことをする時間はあまりなく、reading material 以外の知識を持っていくと discussion のネタになります。

④語学面での苦労・アドバイス等

語学ができないことで他のことまで何もできないように見られてしまうため、しっかりできることをアピールする必要がある。

語学は、話すスピードがとても速く、慣れるのに時間が必要。

スラングが全くわからない。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

特になし。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

設備は簡素。一応、図書館、食堂はあるが、食堂では昼食のメニューは一種類のみ。

PC 環境は、校内に無線 LAN が通っているのに加え、PC ルームもある。コピー、プリントアウト、スキャンのサービスも存在。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

東大の国際交流のホームページ

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

今自分がどのくらいの英語力を持っているのか。今行くことが時期的にベストなのか。留学の目的。等をよく考えていないと何もせずになんとか終わってしまいます。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

1 留学の目的

今回留学するにあたり、私は参加前に以下の目標を掲げた。①平和構築の実践。教養学部で平和構築に興味を持ち、関連した授業等を履修したが座学では実際の問題に対してリアリティを持つ事に限界があり、自分達がすべき事を見定められなかったため。②コスタリカの人々と平和について話す事で平和の「輪」を広げる。コスタリカは日本と同じように軍隊を持たず、「平和の国」と謳っているので、③海外の学生と議論を戦わせて互いの価値観の違い等に触れると同時に交流を深める。④海外で英語を使って勉強する体験をする。漠然と将来留学したいなどと考えていたが、本当にその価値はあるのか。

2 現地での活動

プログラムは①平和構築に関する lecture と discussion、②インターンの2つのコースからなっていた。生徒は約40人で、出身はUC Berkeleyが20人ほど、東大が3人、オーストラリアが2人、ドイツが1人、デンマークが3人、スイスが1人と、プログラム外の平和大学の生徒が10人ほど。

(1) lecture、discussion のクラス

午前中2時間の lecture、午後に2時間の discussion が行われた。扱うテーマは国際法、国際経済、移民、アラブの春、宗教、国際政治、開発など多岐に渡り、毎回授業前に60ページほどの事前資料を予習する必要があった。

Lecture の内容は基本的な知識の確認と新たな分析モデル、考え方の提示という流れが多かった。基本的な知識の確認の段階では特に困る事なく授業についていけたが、新たなモデルの提示などではなかなか理解に苦労した。もっとも、自分の英語力に問題があったためで、英語力があれば平和構築を専門にしていなくても容易についていける授業であったと思う。

Discussion では全体を3つのグループにわけ、各クラスの tutor が discussion をしきる形で、lecture の内容には基づくものの discussion のテーマまで比較的自由に議論が行われた。Discussion になると学生は一律に白熱し、濃密な discussion が行われた。

(2) インターン

平和大学での lecture、discussion のクラスが終わったあとは5つのグループに分かれてインターンを行った。私はカリブ海付近の熱帯雨林に派遣され、カエルのための池や、職員のための熱帯雨林の通路の作成、カエルや蝶の採取、施設の整備を行った。仕事後は、職員や研究者の人々と話したり、一緒に近くの公園でサッカーをしたりバーに行ったりと、熱帯雨林のスタッフと同等に扱ってもらった。

3 留学目的の達成について

(1) 「平和構築の実践」に関して

インターンを行ったことが一種の「平和構築の実践」といえる。初めはわずか2週間しか滞在せず何ら専門的知識もなく肉体労働などほとんどやった事のないような自分達にいったい何ができるのだろうかと思っていた。しかしながら熱帯雨林の保護のための仕事に参加する事は熱帯雨林の保護それ自体だけでなく地域社会の発展、ゆくゆくはコスタリカの発展にもつながる事で、自分達の活動はとても小さな事だがインターンに参加することそれ自体平和構築に貢献しているのだと実感することができ、小さな事がとても大事だと自信をもって言えるようになった。

(2) 平和の「輪」

コスタリカは日本で言われるような「平和」の国ではないし、人々はそこにはあまりアイデンティティも持っていない。そのため、コスタリカの一般市民と平和について話すことはできなかった。彼らは平和というよ

り、観光大国という事を強く意識しているようだった。

(3) 多様な価値観

この経験が最も大きいと感じている。例えば、Discussion のクラスで、平和構築の Vital Core の内何が一番大事か？について話し合った時に、ほとんどの学生が Survival, dignity をあげたところ、アフリカの学生は livelihood をあげた。自分の国で幼い時から飢餓に苦しむ人々を間近で見てきた彼の話には本当に説得力があり、今自分達が「世界のため」と思って考えている事が全く的外れなのではないかと疑いたくなるような瞬間だった。また、UCB 生の移民としての経験に基づく話も聞いた。日本に移民はほとんどおらず、移民について普段考えた事がない。「移民である」ということは彼らのアイデンティティの中核をしめており、それについて全く考えないことで理解を深めようなどと思うのは大間違いだと思い知らされた。

(4) 海外で勉強すること

海外で英語を使って勉強する事の重要性を痛感した。最も印象的だったのは情報量の違い。例えば、日本と外国の資料の量は圧倒的に違う。最終プレゼンテーションでスーダンについて発表したのだが、日本語で資料を調べてもほとんど資料がないのに対し、英語ではとてもたくさんの資料がある。Lecture では、平和構築外の分野から様々な分析モデルが応用されて紹介されたが、このような資料の量の違いがモデルの豊富さの要因であることは間違いない。また、直接聞く事のできる情報の質、量の違いも感じた。アラブの春についての lecture で、エジプトのデモに参加した学生と skype を使用して議論したのだが、日本で得られる又聞きの情報とははるかに異なった、実体験に伴ったリアリティのある話が聞け、また、私からみれば少し偏った考え方であり、日本にいて自分だけの価値観でアラブの春を考えていたらとても考えつかないような事を話していた。プログラムの中で繰り返し述べられていたことだが、「個々の文脈にそって」考える事が何よりも重要である以上、外国の事を取り扱うのならその国の人々の根底に流れる価値観を理解しなくてはならないのだという思いがよりいっそう強まった。

4 留学を通じて

何よりも、2 週間仲間と熱帯雨林で寝食を共にした経験が大きかった。ネイティブとの圧倒的な語学力の差、よく学びよく遊ぶ彼らの切り替えの早さ、普段から「勉強」としてではなく議論が当然のように行われ、自分の意見を自信をもって発表できる彼らの強さ、話題の豊富さ等をやはり常に感じながらも、自分との差をある程度明確に測ることができたため海外学生との見えない「壁」のようなものはなくなった。確かに英語力に関して大きな差があるものの、通じないわけではないし、discussion で意見を述べることも文化の差に過ぎず、日本人でも慣れてくれば十分渡り合えるのではないかと感じた。(もちろん、ダブルメジャーを採用する海外の学生の知識の幅広さに対抗できるようにする必要はあるが。)そして、その差を実感したからこそ、彼らと同じ舞台に登りたいという気持ちが強くなった。

次に、留学を通じて自分が日本人であることを強く意識した。国際交流の文脈で日本人が語られる時は、「英語圏ととても離れており英語が苦手」「自己主張ができない」など、ネガティブに語られることが多く、今回の留学でも確かに日本人である事の disadvantage は感じた。例えば、スペイン語のクラスでは全く同じ初修段階から始めたのに英語圏の学生の方が覚える速度が速く、はじめて学ぶ言葉でもなんとなく意味がわかったりしていた。

しかしながら、より強く感じたのは日本人であることの利点だ。日本人の方が勤勉で、細やかな気配りもでき、相手に対する敬意を目に見える形で示すのが上手である、等日本人の国民性は人との関係を築いていくにあたってとても有利だ。今後グローバル化が進んでいって異文化間の接触が増えていくにあたり、日本人のこのような国民性はとても重要な役割を果たしうと思った。

移民や混血も多く多様な文化に普段から触れている外国に対し、住民のほとんどが日本人であり他文化に触

れることが極端に少ない日本人は自分達が「日本人」であることは普段は全く意識しない。宗教に関しても特定の信仰を持っている人は少なく、ほとんど意識することはない。だからいざ突然に海外に行くと周りの多様性や文化の大きな違いにとまどい、自分達の弱点ばかり目について、海外との差を強く感じるのだと思う。しかし一旦、彼らと同じステージにあがってしまえば日本人であることは大きな特徴、利点に変化するのではないだろうか。

世界における日本の存在感はとても薄い。海外の学生の多くが日本人の多くは未だに戦前の神道のようなものを信じていると思っていたり、日本人はイルカを食べるんだよね？と聞かれたり、色々誤解されている。日本の存在感を増し、理解を深めてもらうためにもっと日本人は世界にでていく必要があると強く感じた。同時に日本人も世界に興味をもって能動的に関わっていくことが大切だ。例えば、日本にいとイスラム世界は「テロ」「過激派」のイメージしかなく、彼らをおそれてしまっている。そのような偏見が更に彼らを遠ざけてしまい、新たな偏見にとってかわってしまう。偏見を持たずもっと世界に興味を持つ事、世界中の人と関わる事が必要である。この点からも日本人が世界にでていくことが重要である。そもそも日本に籠ってる限り、たった一億二千万人とししか関わる事ができないのだ。

自分に正直になれた。楽しく生きたい。

5 今後について

今までは自分の価値観が変わることを恐れていたが、今回の留学で世界は広く、自分の環境は世界の本当に一部でしかない事、自分の視点が変わる事、自分の世界が広がる事の楽しさを知り、価値観が変わることへの恐れがなくなった。そして何より、そのようなワクワク感がより高いモチベーションにつながっていくことを実感した。将来は、自分の可能性を広げる事が世界の可能性が広がることにつながるような仕事について周りの人々そして世界中と共に高め合っていけるような関係を築いていきたい。在学中に留学する事は学部での勉強の制約上難しいだろうが、卒業後、海外のロースクールに行くなど、再び留学し自分の視野、選択肢を広げより大きなワクワク感、人とのつながりを広げることにつなげていきたいと思っている。